

Next Generation ペンはマキリよりも強し —広報誌による青年部活動の活性化—

網走漁業協同組合青年部
武田 耕一郎

1. 地域の概要

私達が暮らす網走市は、農業、水産業が基幹産業の人口約4万人の街である（図1）。近年、知床が世界自然遺産に登録されたことで道東観光の拠点となっている。



図1 網走市位置図

2. 漁業の概要

網走漁業協同組合は、組合員260名で構成され、平成24年の水揚げ金額は121億6,500万円であった。漁獲物の中でサケは最も水揚げ金額が高く、全国1位、2位の水揚げを誇る。次に、ホタテ、スケトウダラ、キチジの順に水揚げ金額が高くなっている（図2）。

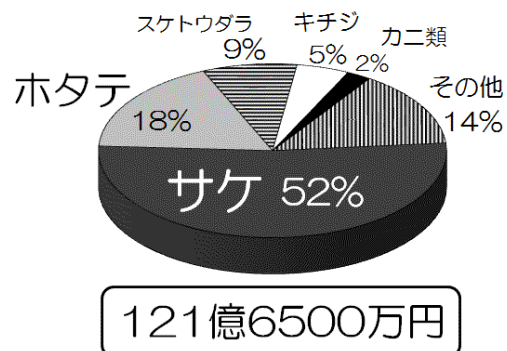


図2 平成24年水揚げ金額

3. 研究グループの組織と運営

青年部は57名で、さけ・ます定置網漁業に37名、ほたて養殖漁業に8名、その他漁業に12名が従事している。平均年齢は29歳と非常に若く、組織構成は、14名の役員のほか広報部が置かれている。

4. 研究・実践活動取組課題設定の動機

私が入部した当時の青年部では主体的な活動が無く、活動に参加する部員も一部の部員に限られているという大きな問題を抱えていた。しかも、新入部員が大所帯になかなか溶け込むことができず、いつの間にか幽霊部員となってしまうことが多々あった。そこで青年部長は平成18年、青年部を活性化させるための打開策を打ち出した。それは学習部、企画部、広報部を立ち上げ、青年部活動に多くの部員を関わらせるというものだった。広報部が広報誌を作成することになったが、以前から発行されていた広報誌は大部分を組合職員に書いて貰ったありきたりな内容であった。そこで、青

年部自身の手で質の高い広報誌を作ることを目標に広報部を立ち上げることとなった。私はパソコンが得意だったことで青年部長から誘われ、広報誌作りに参加することになった。そして青年部長と私のほかに2名が加わり、計4名で“広報部”が結成された。

広報部では、広報誌の質の向上だけでなく青年部の活性化についても話し合い、まず青年部員が活動に参加しやすくなるよう、広報誌で働きかけることから取り組んだ。

5. 研究・実践活動状況および成果

(1) 青年部活動への参加促進

私達は新たな部員が入ると、青年部に早く馴染めるように経歴や座右の銘等の紹介記事と顔写真を広報誌に掲載することから取り組んだ。その流れは現在まで続いている。第9号では、新人に簡単な取材をしてから、絵になりそうな灯台の下に連れ出し、グラビアアイドルのようにポーズを変えさせ、小1時間かけて写真を撮影した。もしかしたら、先輩達は少し嫌がっていたかもしれない。けれども、そうして出来上がったのが、この表紙である(図3)。

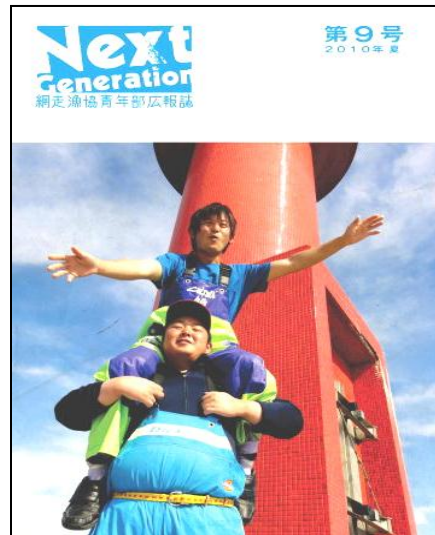


図3 会心の出来映えの表紙

青年部では、組合、関連企業、行政等の水産に携わる人が交流できる機会を設けるため、平成16年からパークゴルフ大会を主催している。広報誌では多くの人に参加して貰えるよう案内を目立つように掲載している(図4)。また、自他共に認めるパークゴルフ達人の青年部長を取材して、スコアアップ語録「鬼の五箇条」を作成し、本気で楽しむためのパークゴルフ講座を掲載したこともある(図5)。その結果、今では80名を越す大きな交流の場となってきた。



図4 パークゴルフ大会参加案内



図5 青年部長による本気のパークゴルフ講座

各青年部活動の出席確認は、役員が分担して行うことになっているのだが、その際に役立っているのが、毎号の巻末に掲載している今後の行事予定である。たった数行ではあるが、「知らなかった……」とは言わせない絶大な力を持っている。

(2) 誌面の改革

これまでのありきたりな内容から脱却するために、青年部員が本当に知りたい情報とは何だろうかと広報部で会議を重ねた。そして、仕事で使えるスキルアップのための記事を取り上げてみようという事になった。

その一例が、漁師の命とも言えるロープについての記事である。製網会社取材を申し込み、ロープの材質ごとの特性と適した用途をまとめ、白色と黒色のロープではどちらが紫外線に強いのか、ロープの撚（よ）りと伸縮性の違いによるスレ、切れやすさの関係について記事にした(図6)。

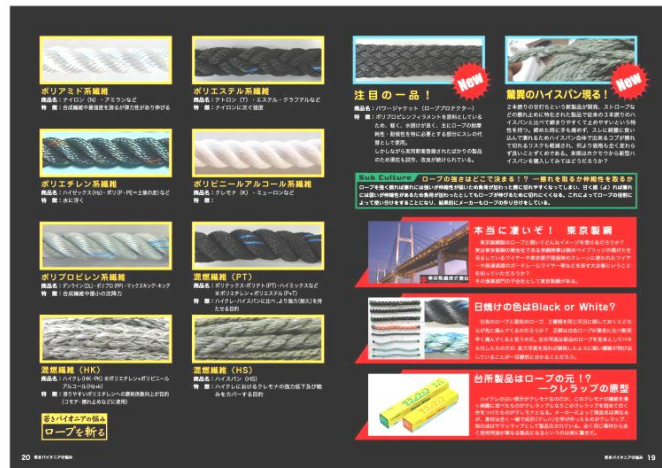


図6 ロープの材質と用途についての特集

また、さけ・ます定置網漁業に従事する青年部員が6割を超えていることから、「サケ種苗ができるまで」を企画したこともある。さけ・ます増殖事業協会（以下：増協）に取材を申し込み、採卵、稚魚飼育、海中飼育について3部に分けて特集記事を掲載した。何度も作業現場へ行き、体験取材することで一つ一つの作業に細心の注意が払われているのを感じ、種苗と一緒に人の「想い」もバトンタッチされながら、放流事業が行われているということの記事にした。(図7)。



図7 3部連載「サケ種苗ができるまで」

網走には私の母校でもある東京農業大学がある。アクアバイオ学科という水産関係の学科から毎年青年部に出前授業の依頼があり、大学OBの部員がサケの捌き方について講義を行っている(図8)。それがきっかけで、対談をさせて貰ったこともある。どのような研究が行われているか取材するとともに、定置網に多く入るマンボウの生態や利用について質問したり、定置網の中に入ってサケを食い荒らすアザラシについての疑問をぶつけ、私達が知りたい情報を集めた記事を書くことができた(図9)。



図8 農大 OB の青年部による実践指導と
農大生の血染めのピースサイン



図9 アクアバイオ学科の特集記事と
先生との対談

対談記事が好評だったため、色々な対談をやろうとした時に、ふと気が付いた。地元を盛り上げようと頑張っている人達とじっくり話をしたことがない……そこで企画したのが「網走一番秋祭り」の主催者、網走青年団体連合会（以下：青团連）の代表との対談である。青团連とは、市内の青年部 10 団体が結成している組織で、私達もその一員である。「網走一番秋祭り」では、長さ世界一のチクワを作ってギネス記録に認定されたり、タレントのさかなクンを招いて、私達が準備したお魚ふれあい水槽で青年部長とお魚講座をやって、祭りを盛り上げた実績がある（図 10）。そこで青团連の代表と網走の今後の展望や、網走における水産業について意見交換を行った。その甲斐あって、熱い想いが詰まった記事を書けることができた（図 11）。



図 10 青团連と一緒に盛り上げた
網走一番秋祭り



図 11 網走の将来について対談

広報誌では珍しいトピックスや、青年部として重要視している課題についても記事にしている。特にサケの密漁に関する記事は毎年必ず掲載しており、増協から「とても心強い活動なので密漁監視パトロールと合わせて今後も継続して貰いたい」という嬉しい評価を頂いている(図12)。

広報誌は操業や青年部活動の合間に作成しており、クオリティを維持するため1年に2回の発行としているが、それでも締め切り前には番屋へパソコンを持ち込み、睡眠時間を削って作成している。広報部結成後、8年間継続して発行してきた広報誌は、通算15号となった。発行部数は毎号300部で、私達の組合のほか、近隣漁協、水産関係機関、市内の各団体、大学、道や市町村、取材でお世話になった団体へ配布している。



図12 密漁監視について

こうして、広報誌の発行を続けるうちに青年部員だけでなく周囲からも「青年部らしくて面白かったよ。」とか「足で稼いだからこそ書ける記事だね。」といった反響が返ってくるようになり、いつしか広報誌の発行自体が青年部活動の大きな柱の一つとして認識されるようになり、私達の広報誌が大きく生まれ変わったことを実感した。

(3) 青年部活動の活性化

広報誌で参加を促し、役立つ情報を提供して、活動を紹介することで青年部活動は徐々に活性化してきている。現在では小学校や大学への出前授業、地域イベントや農協と連携した水産物の販売、海浜清掃、植樹、密漁監視、調理講習会、青年部ブランドのサケの山漬け加工等(図13)、どこの青年部にも負けないくらい活発に活動している。



図13 活発になった青年部活動

青年部の生き生きとした活動を記事にするのも、広報誌の重要な役割である。活動を広く知って貰い、私達自身も活動の意味や実績をしっかりと認識することで活動へのモチベーションが更に高まっていくと考えている。

広報誌の取材をしていて、今後やってみたい企画の話になったり、青年部がこんな活動をしているという話が発展して、講義や出店等を依頼され、活動が更に広がるという嬉しい成果が見られている。特に出前授業の実施数は顕著で、平成20年は3回だったのに対し、平成23年以降は毎年10回の出前授業を行っている（図14）。

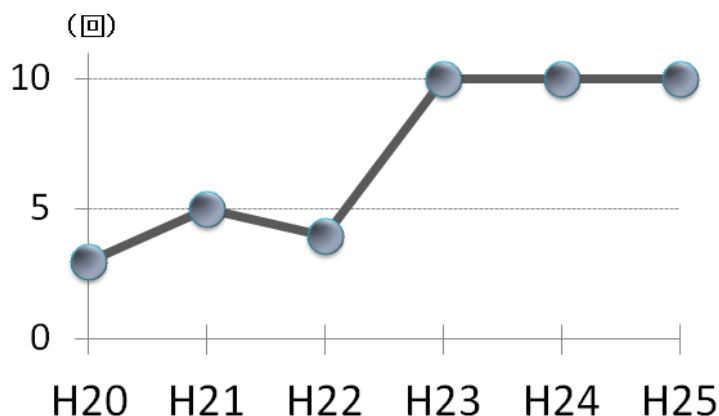


図14 出前授業の実施回数

このように広報誌によって青年部活動が確実に活性化してきている。マキリは漁師にとって無くてはならない道具だが、青年部を活性化させることにおいては、まさに“ペンがマキリよりも強し”ということを実感している。

(※マキリ：漁業用小刀)

6. 波及効果

広報誌の取材や青年部活動を通じて、大学や市内の様々な団体等とネットワークを築き上げることができ、見たことの無い魚が網に掛かった時やサケの山漬けを販売する時等、ちょっと困った時に気軽に相談できる関係となった。水産物を利用した出前授業を行ったり、各種イベントで市民や観光客が楽しみにしている水産物を大量に準備できるのは私達青年部だけである。しかも行動力があって大人数を集められる青年部が果たす役割は非常に大きい。このように私達は地域ネットワークの中で、他の団体と役割分担をして互いに補いながら青年部活動を行い、地域の活性化に貢献することができたと自負している。

7. 今後の課題や計画と問題点

始めは、わずか4名で立ち上げた広報部だったが、賛同者が加わって現在では10名まで仲間が増え、より良い広報誌を作ろうと奮闘している。

近年、全国的に青年部活動が停滞してきていると聞くと、「広報誌というありふれた手段でもやり方を変えるだけで、ここまで出来るんだ！」ということをもっと示して行きたいと考えている。将来的には、地域で最も勢いのある私達漁師が中心

となって、網走市の活性化まで繋げていきたいと考えている。それこそが私達が目指す Next Generation の真の姿である。



広報部で
発行した広報誌一覧